前　田

山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾地区県営ほ場整備事業に伴う

前田遺跡発掘調査報告書

1983

小淵沢町教育委員会

序　　文

小淵沢町は山梨県の西北端にあり、八ヶ岳南麓に展開する一大緩傾斜地上に位置し、豊かな自然の環境に恵まれた町です。さて八ヶ岳山麓は山梨県と長野県に跨り広大な広がりをみせる洪積台地であり縄文時代から歴史時代までの遺跡が多量に埋蔵されており埋蔵文化財の豊庫といっても過言ではありません。近年北巨摩郡の各市町村では圃場整備事業に伴う発掘調査により歴史的文化的に貴重な数多くの遺跡が発見されています。今回報告いたします小淵沢町下笹尾字前田の前田遺跡もそのうちの一つで、発掘された多数の出土品や住居跡を目のあたりに見て、その頃の住民の生活様式とか、生活感情がどのようなものであったかを窺い知ることができ、まことに感無量なものがあります。発掘された品々は、貴重な価値を有するものでありますので町文化遺産として、永く保存し、町民の皆様方が文化財についての理解を深め、学術、学習等に幅広く活用されるよう期待するところであります。

なお、前田遺跡発掘調査にあたり、御指導くださった山梨県教育委員会文化課、山梨県埋文センターおよび御協力頂いた関係者の方々に深く感謝申し上げ発刊のことばといたします。

昭和58年３日

小淵沢町教育委員会

教育長　宮沢辰雄

例　　言

1，　本書は山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書である。

2，　発掘調査は小淵沢町教育委員会が主体となり、昭和57年10月25日から同年11月25日まで実施した。整理作業は昭和57年11月26日から同年12月18日まで小淵沢町立郷土資料館で行なった。

3，　本書の執筆、遺物の実測、トレース、図版作成、遺物写真の撮影、作成は佐野勝広が行なった。

4，　発掘調査及び本書作成にあたって次の諸先生の御指導助言を頂だいた。
末木　健氏（山梨県教育委員会文化課）　坂本美夫氏（山梨県埋文センター）　新津　健氏（山梨県埋文センター）　山路恭之助氏（須玉町教育委員会）

5，　遺物は小淵沢町立郷土資料館、実測図は小淵沢町教育委員会が保管している。

前田遺跡調査組織

調査主体者	小淵沢町教育委員会
調査担当者	佐野勝広（国士館大学卒業）
調査参加者	下笹尾地区前田遺跡発掘調査協力団の方々
事務局	内田英一（小淵沢町教育委員会社会教育係長）

目　　次

序　　文

例　　言

Ⅰ　遺跡の位置と環境…… 1

Ⅱ　調査に至る経緯と調査経過…… 2

Ⅲ　遺　　構…… 4

1　住　居　址…… 4

2　掘立柱建物址…… 9

3　溝　状　遺　構…… 10

4　土　　壙…… 10

Ⅳ　遺　　物…… 11

1　住居址出土遺物…… 11

2　掘立柱建物址出土遺物…… 14

3　溝状遺構出土遺物…… 14

4　土壙出土遺物…… 14

Ⅴ　前田遺跡に於ける若干のまとめ…… 15

遺構について…… 15

出土土器について…… 16

前　田　Ⅰ　期…… 16

前　田　Ⅱ　期…… 16

前田Ⅰ期、Ⅱ期の編年的位置…… 17

鉄製品について…… 17

Ⅵ　おわりに…… 17

挿　図　目　次

第　1　図	前田遺跡位置図	1
第　2　図	前田遺跡付近全測図	2
第　3　図	遺　構　配　置　図	3
第　4　図	第1号住居址実測図	5
第　5　図	第2号住居址実測図	5
第　6　図	第3号住居址実測図	6
第　7　図	第4号住居址実測図	7
第　8　図	第3号住居址竈実測図	8
第　9　図	第4号住居址竈実測図	8
第　10　図	掘立柱建物址実測図	9
第　11　図	溝状遺構及び土壙実測図	10
第　12　図	第1号住居址及び第2号住居址出土遺物実測図	11
第　13　図	第3号住居址出土遺物実測図	12
第　14　図	第4号住居址出土遺物実測図	13
第　15　図	溝状遺構及び土壙出土遺物実測図	15

図　版　目　次

図版１　　遺跡近景(北東より)　第１号住居址(南より)　第１号住居址鎌出土状態

図版２　　第２号住居址(西より)　第３号住居址(南より)　第３号住居址竈(西より)

図版３　　第３号住居址遺物出土状態　第４号住居址(南より)　掘立柱建物址(南より)

図版４　　溝状遺構(北より)　節１号土壙(南より)　第２号土壙(南より)

図版５　　第１号住居址(鎌・鉄鏃・砥石)及び第２号住居址(土器)出土遺物

図版６　　第３号住居址(土器)出土遺物

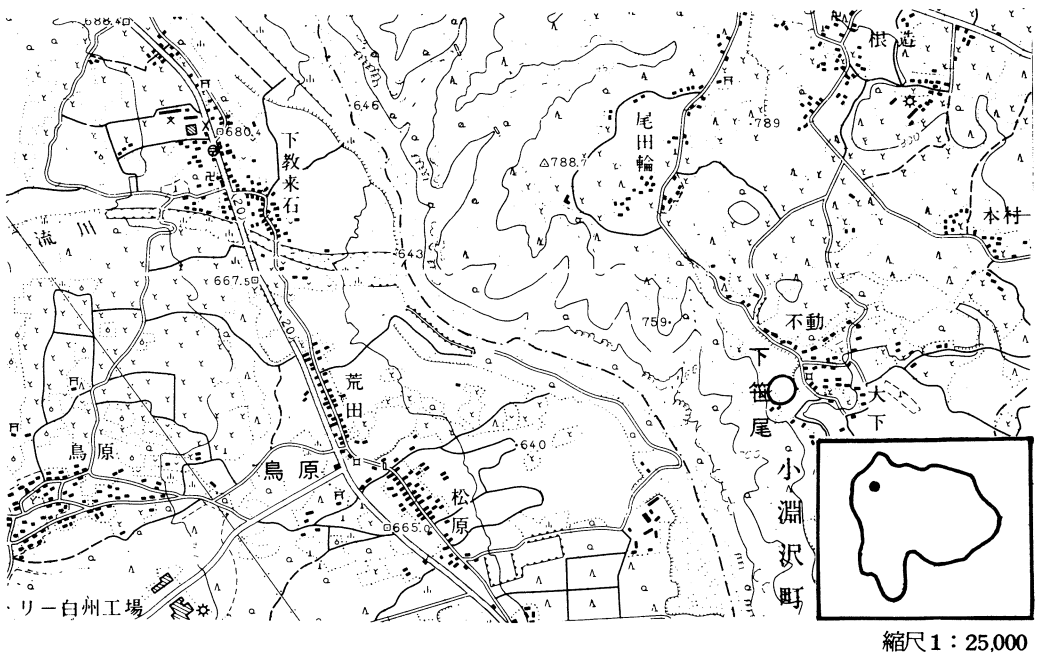
図版７　　第４号住居址(土器)出土遺物

図版８　　第１号土壙及び第２号土壙出土遺物

Ⅰ　遺跡の位置と環境

小淵沢町は山梨県西北端の県境に位置し、西及び北は長野県諏訪郡富士見町、南は山梨県北巨摩郡白州町、東は長坂町にそれぞれ隣接している。小淵沢町は八ヶ岳連峰の南端にある権現岳、編笠山、西岳より続く洪積地上にある。前田遺跡は、山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾字前田に所在する。国鉄中央線小淵沢駅から南に約５㎞の地点で、長坂町との境までは約 500ｍを測る。遺跡は北西より北東に向う緩傾斜地で、北西、北東端の比高差は約１ｍで、現状は水田と桑畑であった。小淵沢町の遺跡は昭和54年度に町教育委員会と山梨考古学研究会が実施した遺跡分布調査によると、67ヶ所の遺跡が確認されている。その67ヶ所のうち半分以上は、縄文時代の遺跡で、特に縄文時代中期の遺跡が圧倒的に多い。本町で発掘調査の実施された遺跡は中央自動車道建設に伴うもので、小淵沢町上久保地内字中原の中原遺跡と小淵沢町宮久保地内字上平出の上平出遺跡であり、両遺跡共に縄文時代中期、後期と平安時代の遺構と遺物が発見された。

又この地の周辺は中世において、甲斐・諏訪の往来を押える拠点の一つとして交通の要衝を占め、本遺跡の西の釜無川左岸に見られる急崖上には昭和53年に発掘調査された笹尾塁跡が存在する。



第１図　前田遺跡位置図

Ⅱ　調査に至るまでの経緯と調査経過

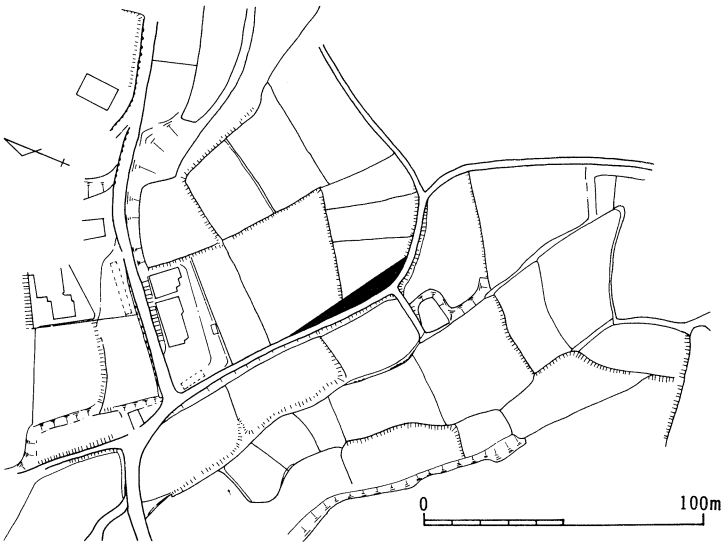
昭和56年11月に県文化課が下笹尾地区の県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の有無を確認のため同区踏査の結果、縄文時代より歴史時代までの埋蔵文化財遺物の散布が確認された。理蔵文化遺物の確認された地点は57年度の圃場整備事業計画に入っており、このため踏査の結果をふまえて、峡北土地改良事務所、県文化課、小淵沢町教育委員会の三者協議が行なわれ、その結果、圃場整備事業に伴って拡張される農道の拡張部分約 400㎡の記録保存を目的とした発掘調査を実施することになり、峡北土地改良事務所の委託を受けて小淵沢町教育委員会が昭和57年10月25日より昭和57年11月25日まで実施した。前田遺跡の発掘調査は10月25日に重機により表土剝ぎを行ない、その後調査区に任意の基準杭を設け、調査区全体に、北から南へA～F、西から東へ1～32のグリット（ 2m×2m）を設定した。10月25日より作業員が入り、本格的な調査を開始し、先ず遺構の検出に主眼をおき精査を行なった。遺構の確認は約5日間を要した。検出した住居址は先ず竈の位置を確認し、セクションベルトを十字に入れて調査することにして、11月2日より掘り下げ作業に入った。発見された遺構は、竪穴住居址4軒、掘立柱建物址1棟、溝状遺構1本、土壙2基の8遺構である。昭和57年11月25日、遺跡の全体測量、全体写真を撮り、その他全ての作業を終えて前田遺跡の発掘調査を完了した。本遺跡は水田と桑畑であるため耕作が激しく土層の推積状態は単純な層序を呈している。本遺跡の基本土層は4層に分けることができた。

第Ⅰ層　暗褐色土（表土層、耕作土）

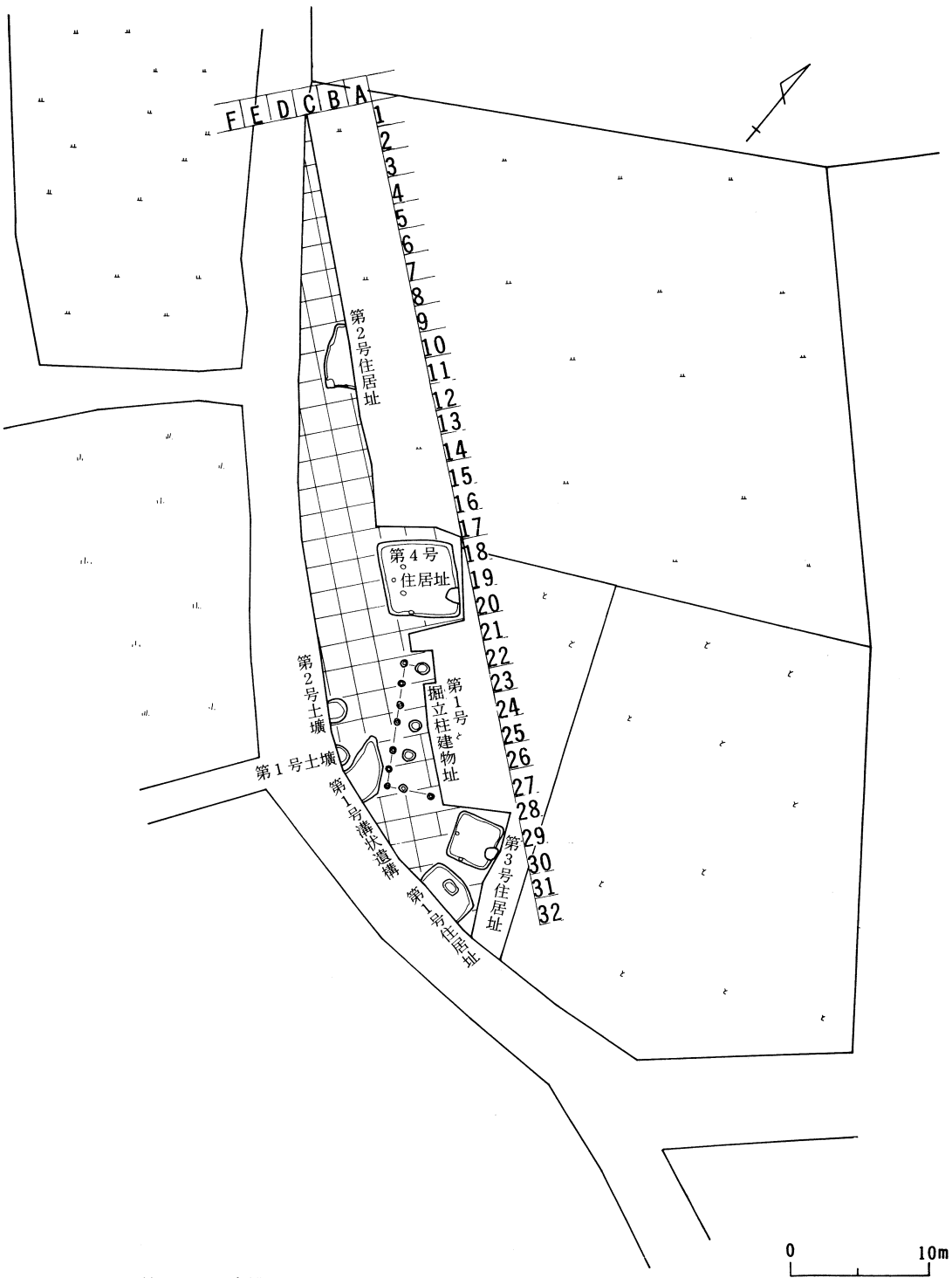
第Ⅱ層　黄褐色土（水田の床土・床土にロームを固めて使用。鉄分を多く含む）

第Ⅲ層　黒褐色土（スコリア、ローム粒子を含む）

第Ⅳ層　ローム　（黄色味が強く、粘性があってしまっている。



第2図　遺跡付近全測図


F E D C B A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32
第2号住居址
第4号住居址
第2号土壙
第1号掘立柱建物址
第1号土壙
第1号溝状遺構
第3号住居址
第一号住居址
0
10m

第３図　遺構配置図

Ⅲ 遺　　構

1 住　居　址

第1号住居址（第4図）

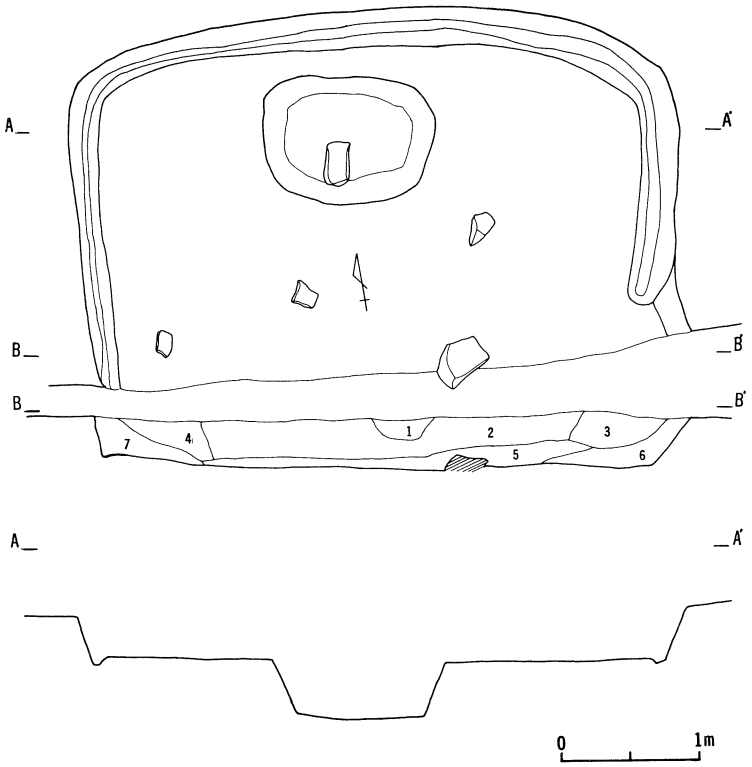
本住居址は前田遺跡において検出された住居址の中で最も南に検出された。住居址の南側は農道により切られているため北側半分を検出したのみである。住居址のプランはローム面を掘り込んで構築され、東西4.1mの隅丸方形を呈するものと考えられる。壁は床面よりやや傾斜をもって立ち上がっている。壁高は約40cmを測る。周溝は壁の直下で巡り、幅5～10cm、深さは5cm。柱穴は検出されなかった。内部施設として断定はしかねるが、北壁付近より東西 110cm、南北90cm、深さ40cmの長方形ピットが認められた。このピットから小破片の土師器が出土している。

第2号住居址（第5図）

本住居址は遺跡の北西隅にあり、北側3／2が調査区外にかかるため、その全容は窺えないが東西4.5mを測り、プランは方形を呈すると思われる。住居址の掘り込みは確認面から10～15cmと浅い。壁は床面よりなだらかに立ち上がり、壁高は10cm前後である。周溝は南コーナー部分で幅50cmと広く、他は8～10cm、深さ12～16cmで調査区域では東壁から南壁にかけて認められる。床面はロームを掘り込んでつくっており凹凸が見られ、全体に軟弱である。柱穴は南壁の周溝中にあり、径30～35cm、深さ25cmを測る。平面形は不整円形を呈している。

第3号住居址（第6図）

第1号住居址の北側に隣接して位置する。プランは東西 3.6m、南北 3.8mの隅丸方形の住居址である。主軸方向はN—103°—Wを呈する。壁高は40～60cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面はロームを主体に一部白色粘土を使用して貼床し、比較的良好である。周溝は幅6～20cm、深さ15～20cmであり、東壁コーナー付近で消滅する。柱穴は2個確認され、径15～25cm、深さ20～45cmを測り、2個共壁直下にある。竈は東壁中央よりやや南に寄った位置に設置され、全形をよくとどめている。壁を30cm程度掘り込んで築いて、掘り込みの平面形は三角形を呈する。天井部は平石を数個のせてつくられ、石と石の隙間に補強として白色粘土を用いている。燃焼部を中心に床面から約15cm皿状に掘り込む。煙道部は急に立ち上がっている。全長 1.4m、幅1mで焚口部幅55cmを測る。住居址の覆土は、第1層黒褐色土（ロームブロック、スコリアを含む）、第2層茶褐色土（ロームブロック、スコリアを含む）、第3層明褐色土（ロームブロック、炭化物、スコリアを含む）、第4層暗褐色土（炭化物、焼土を含む）、第5層明褐色土（ロームブロック、少量の炭化物、焼土を含む）、第6層黒色土（粒子密で粘性に富む）、第7層黒色（一部に炭化物を含む、6層よりも粘性はない）。



1, 黒褐色土
（ロームブロック、スコリアを含む）

2, 茶褐色土
（ロームブロック、スコリアを含む）

3, 明褐色土
（ロームブロック、炭化物を含む）

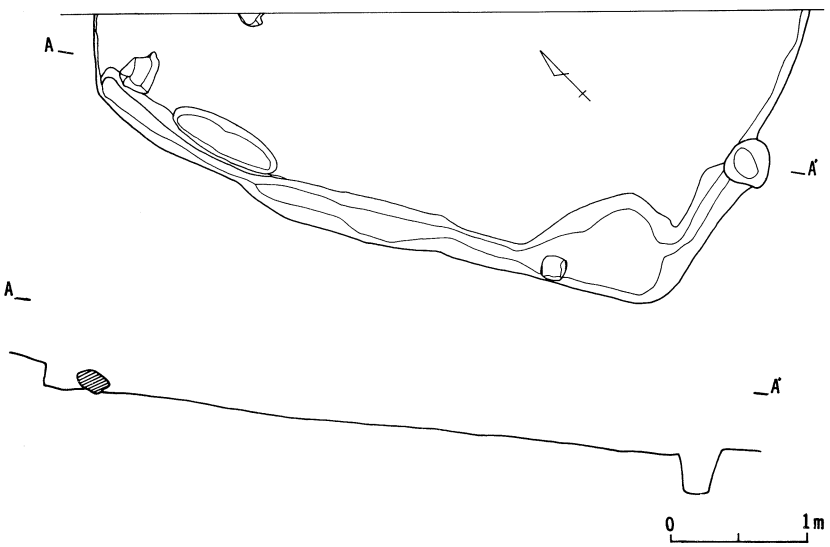
4, 暗褐色土
（ロームブロック、炭化物を含む）

5, 明褐色土
（ロームブロック、炭化物を含む）

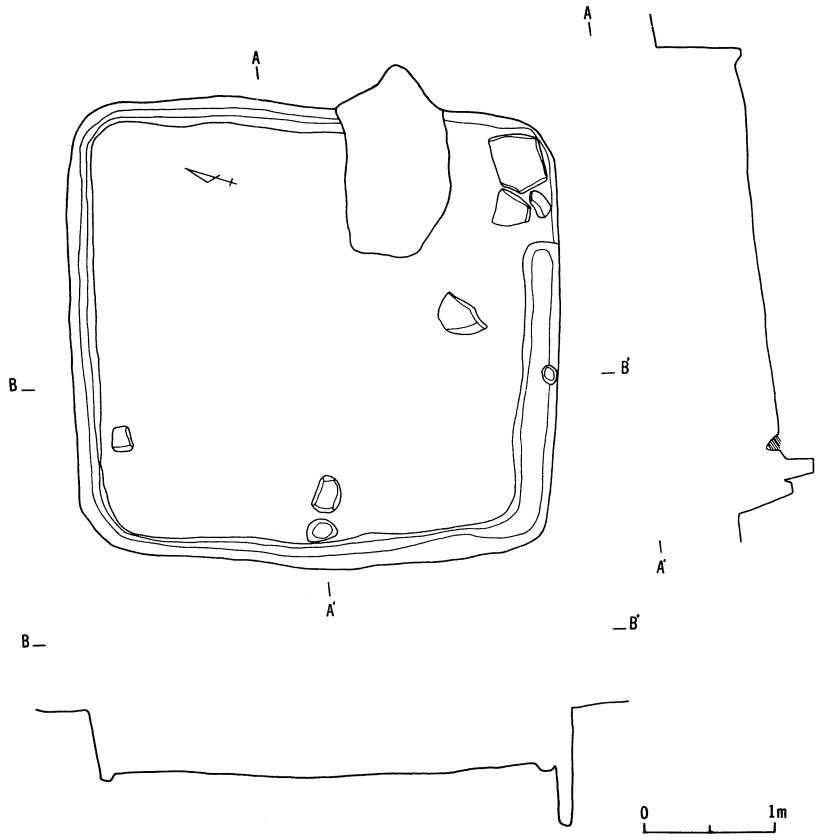
6, 黒色土
（ロームブロックを含みしまり強い）

7, 黒色土
（スコリア、ローム粒子、炭化物を含む）

第4図　第1号住居址



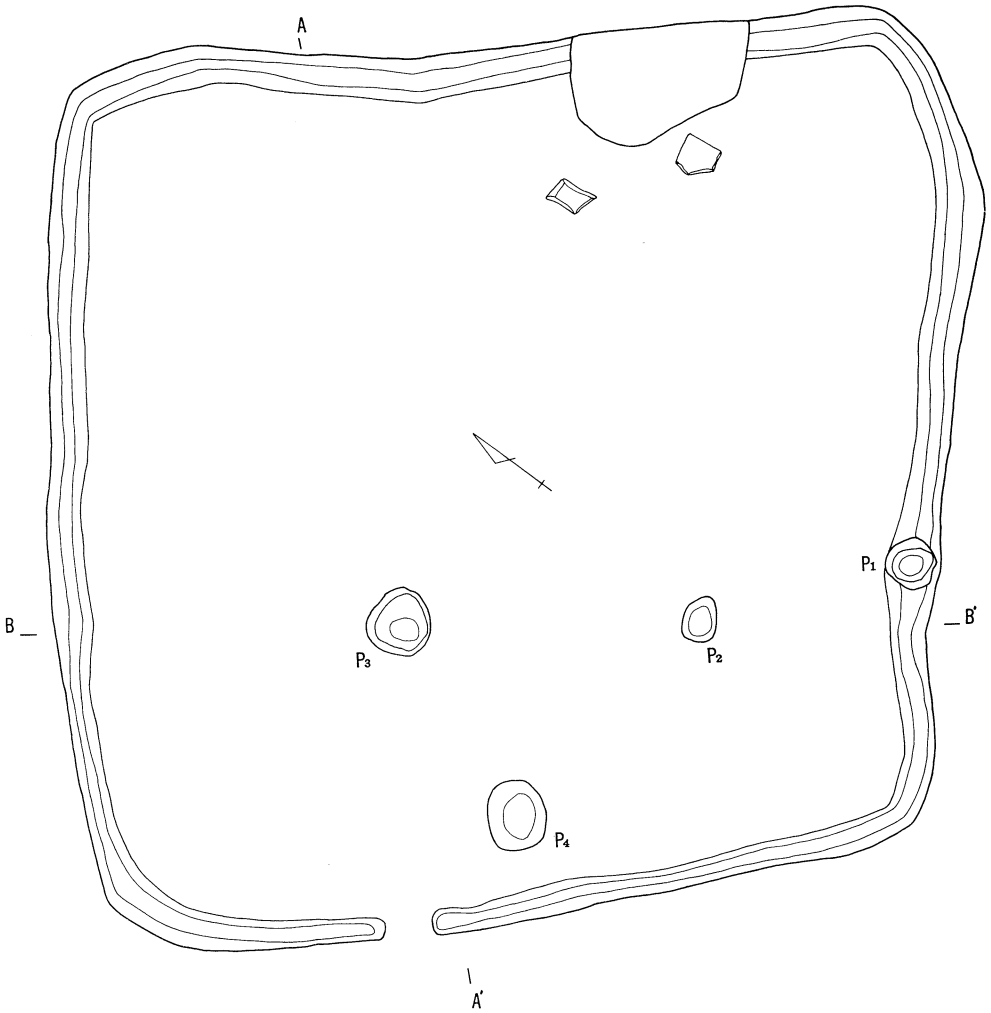
第5図　第2号住居址



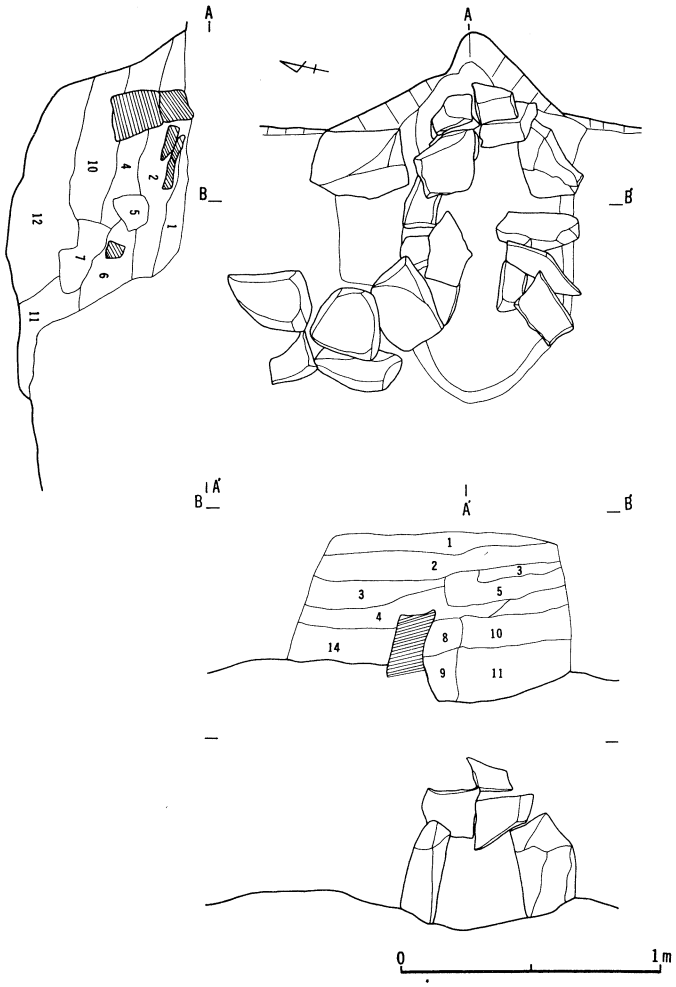
第6図　第3号住居址

第4号住居址（第7図）

本住居址は第1号掘立柱建物址の北西隣に位置する。プランは東西5.9m、南北6mのややひずんだ隅丸方形である。壁高は5～20cmで、全体に壁の残りは悪い。主軸方向はN—128°—Wである。周溝は幅10～15cm、深さ5～10cmを測り、竈の部分と西壁の一部を除いて全周する。床面はほぼ水平であるが小さい凹凸が見られる。ロームブロックと白色粘土を用いて貼床にしており、中央部分は非常に堅く、周辺部になるにつれて黒色土が混り、軟弱になる。柱穴は4個認められP_1は径35cm、深さ65cm、P_2は径30cm、深さ52cm、P_3は径45cm、深さ45cm、P_4は径43cm、深さ18cmを測る。竈は北東壁東寄りに構築されている。天井部は崩壊して東側に流出していて遺存状態はすこぶる悪い。袖は、左袖に河原石1個、右袖に河原石4個を使用し、補強材として白色粘土を利用している。焚口部分から燃焼部を楕円状に掘り込み、深さ30cmを呈する。煙道部は急に立ち上がり壁に接している。



第7図　第4号住居址



1，茶褐色土
（ローム粒子、白色粘土を多く含む）

2，明褐色土
（炭化物、ローム粒子を含む）

3，黒褐色土
（ローム粒子、炭化物、焼土を含む）

4，明褐色土
（ローム粒子、炭化物、焼土を含む）

5，白色粘土

6，明褐色土
（ローム粒子、炭化物、焼土を多く含む）

7，白色粘土
（焼土炭化物を含む）

8，暗褐色土
（白色粘土を含む）

9，赤褐色土
（白色粘土を含む）

10，明茶褐色土
（ローム粒子、焼土、炭化物を含む）

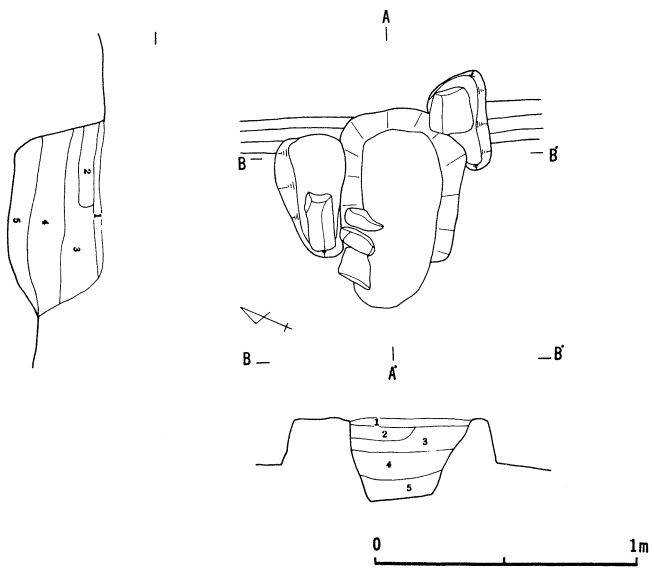
11，黒褐色土

12，暗褐色土
（焼土を多く含む）

13，茶褐色土
（ローム粒子を含む）

14，明茶褐色土
（ローム粒子を含む）

第８図　第３号住居址竈



1，明褐色土
（白色粘土を含む）

2，茶褐色土
（白色粘土を多く含む）

3，黒褐色土
（白色粘土、焼土を含む）

4，暗褐色土
（ローム粒子、焼土を含む）

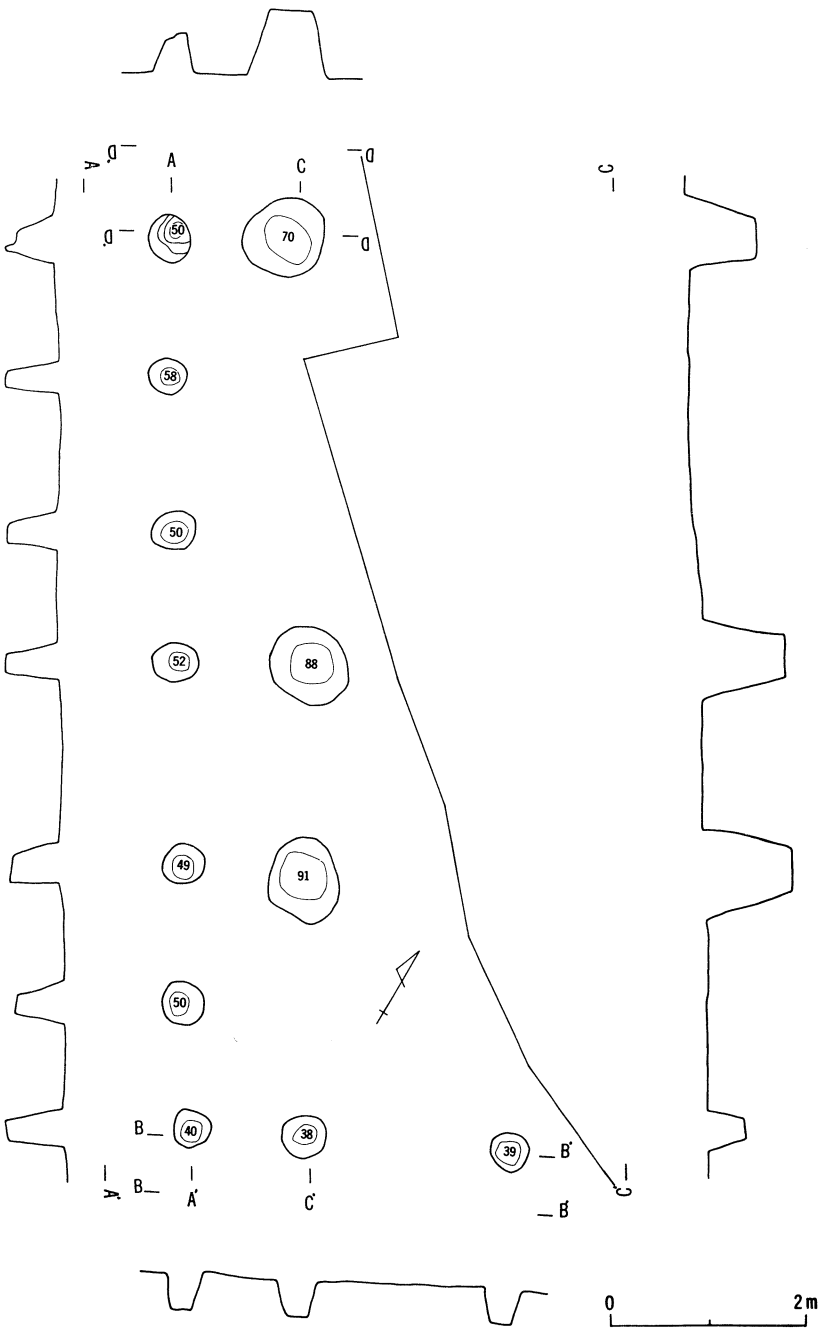
5，焼　土

第９図　第４号住居址竈

2　掘立柱建物址

第１号掘立柱建物址（第10図）

第４号住居址の南側に位置する。東側は調査区外にのびているためその全容は窺えないが形態は南北６間(9.5m）で主軸方向N—33°—Wを呈する。柱間寸法は梁行0.8～1.4m、桁行１～３mである。柱穴の掘り方は円形を呈し径20～90cm、深さ38～91cmで、西側列の柱穴の掘り方はいずれも小さいが、東側列の柱穴４個は径も大きく、深い。出土遺物は土師器坏の小破片が２点出土しているが、小破片のため実測は不可能であった。



第10図
掘立柱建物址

3　溝　状　遺　構

第１号溝状遺構（第11図）

農道によって南側を切られている。最大幅２ｍ、深さは15cm前後である。壁はなだらかなカーブを描いて立ち上がる。覆土は３層に分けられ、第１層黒褐色土（ローム粒子を多く含む）、第２層黄褐色土（スコリアを含む）、第３層黒褐色土（ローム粒子、炭化物を多く含む）である。全容は不明であるが本来は南側に走っていたと思われる。出土遺物は覆土中より縄文時代中期の土器底部破片が１点出土した。小破片であるため、実測は不可能であった。

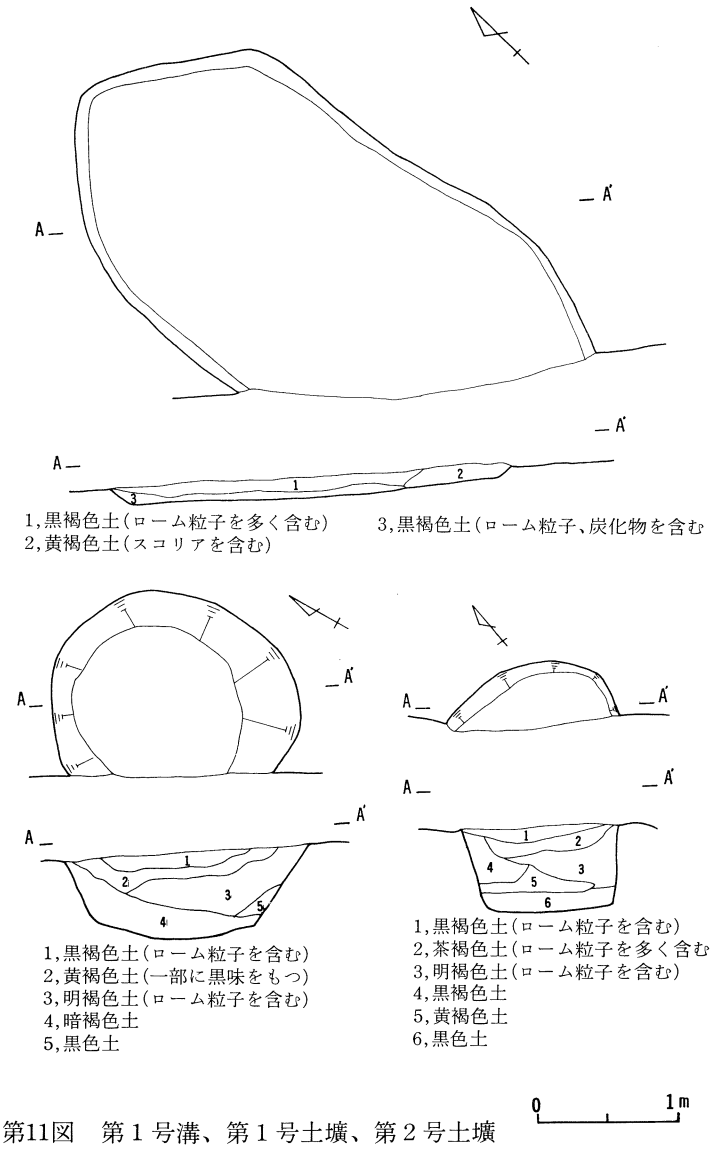
4　土　　壙

第１号土壙（第11図）

農道により南側部分を切られているためその全容は明らでないが、東西１ｍ、深さ60cm、を測り、掘り方は円形を呈すると思われる。底は平担で、壁面は垂直に立ち上がる。

第２号土壙（第11図）

本土壙は東西 1.7m、南北 1.6m、深さ55cmを測り、やや不整円形を呈す。底は中央部分が凹み、壁面は外傾斜して立ち上がる。



1,黒褐色土（ローム粒子を多く含む）
2,黄褐色土（スコリアを含む）
3,黒褐色土（ローム粒子、炭化物を含む

1,黒褐色土（ローム粒子を含む）
2,黄褐色土（一部に黒味をもつ）
3,明褐色土（ローム粒子を含む）
4,暗褐色土
5,黒色土

1,黒褐色土（ローム粒子を含む）
2,茶褐色土（ローム粒子を多く含む）
3,明褐色土（ローム粒子を含む）
4,黒褐色土
5,黄褐色土
6,黒色土

0　1m

第11図　第１号溝、第１号土壙、第２号土壙

Ⅳ 遺　　物

1　住居址出土遺物

第１号住居址出土遺物（第12図）

本住居址出土遺物は非常に小ない。覆土中より土師器の小破片が数点出土し、他に鉄製品の鎌と鉄鏃、それに砥石１点が出土した。実測を行なった遺物は鉄製品と砥石である。

鎌（１）

全体が完全に残ったもので、北壁の中央あたりの壁に密着し刃を上にして出土した。全長17cm、刃部先端幅２cm、刃部中央幅 3.5cm、柄部幅４cmを測り、基部上端を折り返している。その折り返しは一般とは逆に左方向になる。鎌の断面をみると、一枚の鉄板を素材に縦に折り合わせたことがうかがえる。

鉄鏃（２）

五角形式の鉄鏃で幅の広い身をもち、両端に逆刺がつくが退化している。現存長 8.5cm、刃部の長さ 3.5cm、刃部幅３cm、厚さ 0.3cm、篦代 0.9cm、篦被幅 8.5cm、厚さ 0.4cm、篦被の断面は長方形を呈す。

砥石（３）

凝灰岩製の砥石である。使用面上下二面。

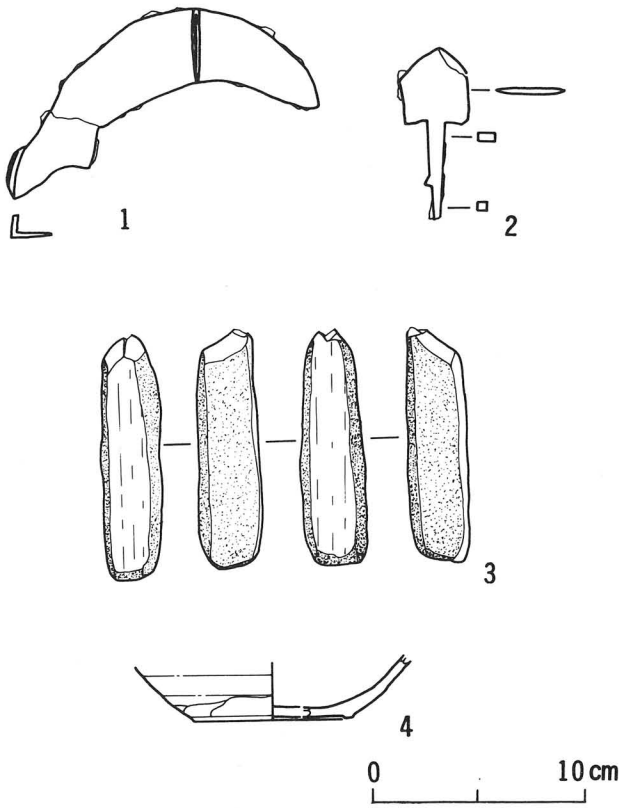
第２号住居址出土遺物（第12図）

覆土中より土師器の高台付坏が１点出土した。

土師器

高台付坏形土器（４）

坏の体部は内彎気味に開く。高台は断面四角形を呈する。体部外面はロクロ整形、体部下半を横方向の篦ケズリが行なわれ、底部は回転糸切り後周辺を篦ケズリによって高台を作っている。色調



第12図　１号住居址(1～3)、２号住居出土遺物

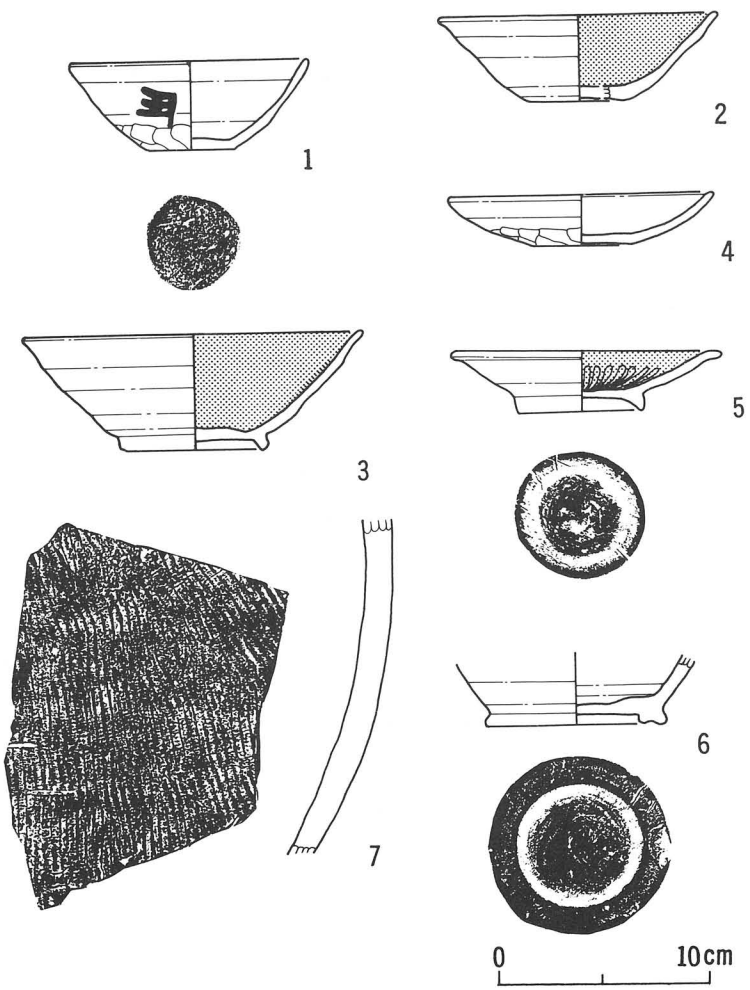
は内面黒色処理、外面赤褐色を呈する。底径7.6cm。

第３号
住居址出土遺物
（第13図）

本住居址より出土した遺物は土師器坏を主体に、住居址の東側で比較的多く出土している。

土師器坏形土器
（１～３）

１は底よりゆるやかに内彎し立ち上がり口縁部に至って外反する。口径に比して小さな底部である。内外面共にロクロ整形が行なわれ、体部下半で横方向の篦ケズリが施されている。底部は全面手持ち篦ケズリを施す。体部に「丑」と読める墨書が見られる。色調は赤褐色を呈し、胎土は小石を含み密で焼成良好である。口径11.2cm、器高 4.3cm、底径４cm。２は底部より外に直線的に開き、外面ロクロ整形を行なっている。内面は黒色処理を施す。底部は回転糸切り痕を残し、篦による二次的整形はみられない。色調黄褐色で胎土中には小石と石英を含む。焼成良。３は高台を有する坏であり底部より内彎しながら外に開き、口縁部で小さく外反する。内面は黒色処理を施し、外面はロクロ整形を行なっている。底部は回転糸切り痕を残す。色調は茶褐色、胎土に小石を含む。焼成良好。口径16cm、器高 5.6cm、底径 6.6cm。



第13図　第３号住居址出土遺物

土師器皿形土器（４，５）

４は底部から大きく外に開くが口縁部でゆるやかに内反する。体部下半に横方向の篦ケズリが施される。底部は全面手持篦ケズリが行なわれている。色調黄褐色、胎土は全体に粗く、焼成良好。口径12.6cm、器高 2.5cm、底径 4.6cm。５は高台付の身の浅い皿形土器である。口縁部

は大きく外に開き、口唇部で一段さらに外に開いて、一部が平担になっている。底部は揚底で回転糸切り痕が残り、高台は貼り付である。外面はロクロ整形を行ない、内面は縦の篦磨きが施され、内面は黒色処理をしている。外面の色調は黄褐色を呈する。

灰釉陶器壺形土器（６）

灰釉陶器壺形土器の底部破片である。底部は回転糸切り痕がみられ高台中央に凹みをもつ。色調は灰色を呈し、一部に淡緑色の釉が付着している。胎土は非常に緻密で焼成良好である。底径 8.8cm。

須恵器甕形土器（７）

７は須恵器甕形土器の胴部破片である。外面は平行叩き目文、内面は指頭の押圧による整形が行なわれ、色調は赤褐色を呈する。

第４号住居址出土遺物（第14図）

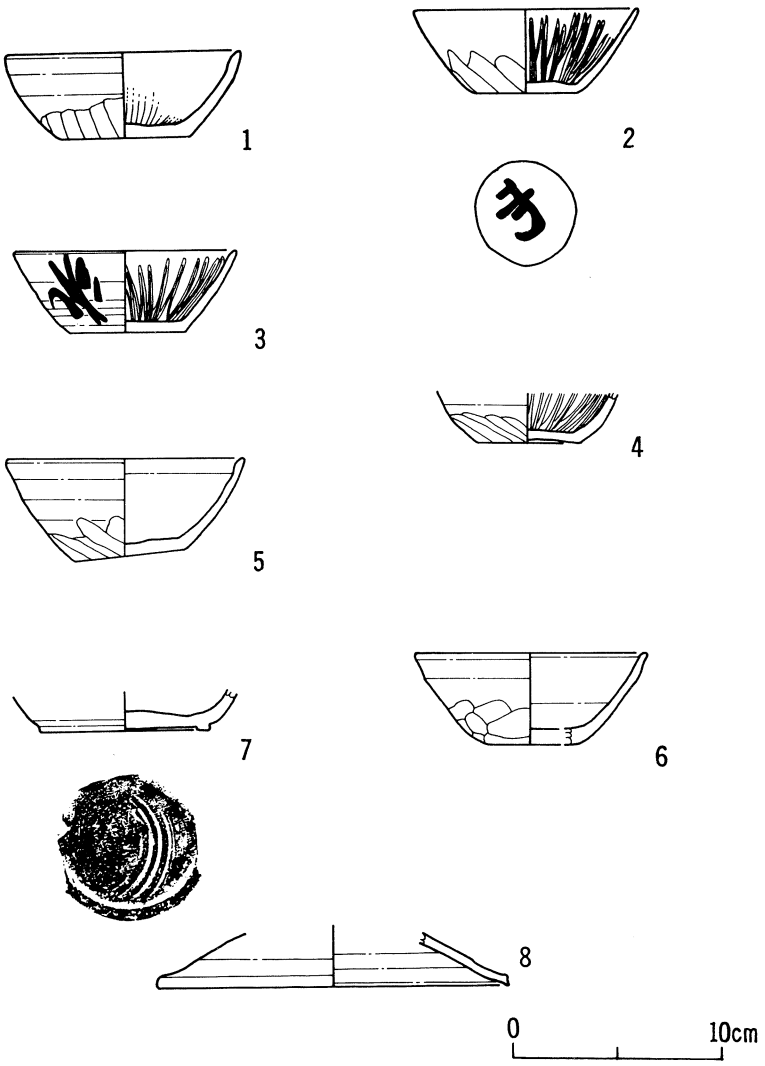
覆土中からの出土遺物は少はく、ほとんどが床面に接して出土している。出土した遺物は土器坏が主体であり、総数25点、このうち図示した遺物は８点であった。

土師器坏形土器（１～７）

１は底部からゆるやかに立ち上がって口縁部にて内反する。内面に放射状の暗文が施され、体部下半に斜方向の篦ケズリが行なわれる。底部は全面手持篦ケズリされている。色調は赤褐色を呈し、焼成はあまり良好ではない。２～４は底部より内彎ぎみに立ちがって、口縁部でいくぶん外反する。体部下半に斜方向の篦ケズリを施して、内面には花弁状の暗文がみられる。３の底部は回転糸切り痕を残し、二次整形は行なっていない。２，４は全面手持篦ケズリされる。色調は赤褐色ないし黄褐色を呈し、胎土中には赤色粒子を含む。焼成は非常によい。２の底部に「寺」、3の体部には「永」の墨書がみられる。５，６は２，３と同様に体部下半に斜方向の篦ケズリが施されるが内面には暗文はみられなく、ロクロ整形が行なわれている。７は高台付坏で、高台はケズリだしの高台である。底部は中央に回転糸切り痕が残り、周辺は手持篦ケズリが施されている。色調は赤褐色である。１、口径10cm、器高 4.1cm、底径 6.2cm。２、口径10.6cm、器高 4.1cm、底径５cm。３、口径10.6cm、器高４cm、底径 5.5cm。４、底径５cm。５、口径11.2cm、器高 4.9cm、底径 5.2cm。６、口径11cm、器高 4.5cm、底径 4.5cm(復元径)。７、底径８cm。

土師器蓋形土器（８）

体部は大きく開き、端部でわずかに突出する。内外面共にロクロ整形が行なわれている。色調は赤褐色を呈し胎土密で焼成良好。口径16.8cm（復元径）



第14図　第４号住居址出土遺物

2，　掘立柱建物址出土遺物

出土遺物は、少量の土師器小破片が出土した。土師器の時期は平安期のものである。

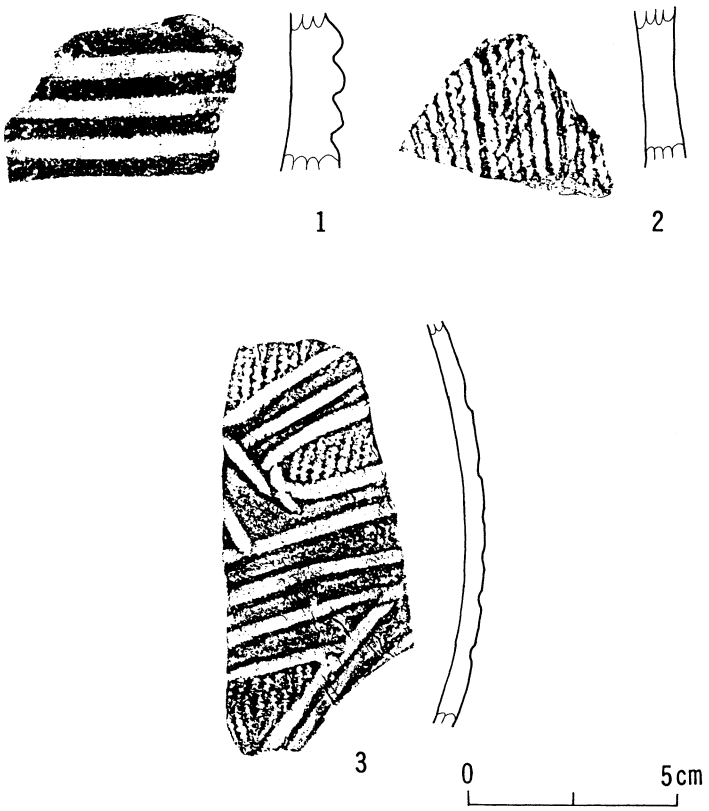
3，　溝状遺構出土遺物

本溝の出土遺物は縄文時代中期と思われる土器底部の小破片である。

4，　土壙出土遺物（第15図）

１は太い沈線を施文するもので、胎土中に石英、砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。２は縄文を施文されているもので、色調は明褐色。３は沈線で縄文帯と無文帯を区画したもの

で、色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。３点の遺物は縄文時代中期と後期の所産と思われる。１と２は１号土壙、３は２号土壙より出土した。



第15図　第１土壙(1､2)、第２土壙(3)出土遺物

Ⅴ　前田遺跡に於ける若干のまとめ

本遺跡で検出した遺構は竪穴住居址４軒、掘立柱建物址１棟、溝状遺構１本、土壙２基であった。これらの遺構に伴って出土した遺物は竪穴住居址より土師器、特に坏類が多く出土し、他に数点須恵器の破片が出土している。又第１号住居址から曲線刃の鎌と五角形式の鉄鏃が出土した。掘立柱建物址から土師器小破片が出土し、その他に、土壙から縄文時代中期と後期の土器破片が出土した。

遺構について

住　居　址

住居址プランは隅丸方形、方形を呈し、規模は１辺の大きさを３ｍ前後を基本として、第４

号住居址の 5.9×6mを最大規模としている。各コーナーに丸味をもち、形は全体に整っている。ただし、第4号住居址はやや不整な隅丸方形となる。柱穴は第2、3、4居住居址にみられ、第1号住居址からは検出されなかった。第2、3、4号共に規則的な位置の関係はないが、南壁に集中する傾向がある。周溝は壁下を全周に近いものと竈部分を除いた3壁下に設けられている。竈は完掘できた第3号住居址、第4号住居址に見られ、位置は東壁の中央より南に寄る。構築材料は河原石を主体に白色粘土を補強材として用いている。掘り方の平面形態は楕円形と円形を呈し、煙道部は壁外に短かく延びる。

掘立柱建物址

西側の柱穴が6間（9.5m）あり、東側柱穴3本は径90cm前後、深さ 100cm前後を測る。本建物址を囲むように3軒の竪穴住居址が構築されていることから、竪穴住居址と共存する倉庫的役割をもった建物址であったことが推察される。

溝状遺構

本構は北から南へ向けて延びていたものと思われる。本溝の性格については不明である。

土　壙

土壙は2基共に平面形は円形で、底は1号がほぼ平で、2号土壙は若干の凹凸をもつ。

出土土器について

ここでは、前田遺跡の竪穴住居址より出土した土師器坏について、最近の山梨県に於ける平安時代土器編年的研究の成果を基にして、その編年的位置について検討した。その結果、2期に大別することができた。

前　田　Ⅰ　期

第4号住居址より出土した土師器坏が相当する。体部下半に横方向ないし斜方向の篦ケズリが行なわれ、内面に放射状ないしは花弁状の暗文が施されている。暗文はみこみ部にみられず口唇部は丸味をもつ。底部は全面手持篦ケズリと回転糸切り痕を残すものが見られる。胎土中に赤色粒子を含む。底径 5.5cmを測る。

前　田　Ⅱ　期

第3号住居址より出土した土師器坏が相当する。Ⅰ期の坏と同様に体部下半に横方向ないし斜方向の篦ケズリが施される。しかし、内面には暗文はみられない。底部は全面手持篦ケズリを行なっている。口径10～11cmを測る。口径に比して底径が小さくなる。内面に黒色処理を施した坏を伴出する。

前田Ⅰ期、Ⅱ期の編年的位置

前田Ⅰ期は所謂甲斐型土器と呼ばれる一群の土器であり、坂本氏等の編年のⅧ期にあたる。年代観は9世紀第4四半世期に位置付けられており、本期もこの年代に相当するものかと思われる。前田Ⅱ期は坏の内面に暗文が施されていないもので、坂本氏等の編年のⅨ期からⅩ期にあたる。年代は10世紀第1四半世期から10世紀第2四半世期に考えられている。本期も同様の年代が与えられると思われる。

以上、前田Ⅰ、Ⅱ期の年代観は、第Ⅰ期が9世紀後半、第Ⅱ期が10世紀前半から10世紀中葉に位置付られると考えられる。

鉄製品について

前田遺跡から出土した鉄製品は、第1号住居址より出土した鎌と鉄鏃の2点である。鎌を形態的に分類したのは土井義夫氏で、大きく4つに分類されている。前田遺跡で出土した鎌をこの分類に従うと、C類に属するもので、C_3にあたる。現在使用されている鋸鎌の形態に類似する。基部の折り返しは右側ではなく左側にあって、左利き用の鎌の可能性がある。本鎌と類似する形態をもつ鎌の例は長野県茅野市判ノ木山西遺跡14号住と長野県上伊那郡辰野町沢入口遺跡2号住出土の鎌にみられる。鉄鏃は北壁付近の覆土中から出土したもので、五角形式で退化した逆刺をもつ。本鉄鏃の用途は出土数も1点であり、武器としては考えられない。平出一治氏は、「山麓考古第4号」の中で住居址から出土する鉄鏃の用途を武器ではなく、「除魔」のための鉄器と考えている。この考え方は経塚や祭祀遺跡から鉄鏃が出土することを考えれば、可能性のないことではないと思われる。

Ⅵ おわりに

今回の発掘調査は、圃場整備事業に伴って整備拡張される農道の拡張部分の調査のみにとどまったが、以上のような良好な成果を得ることができた。しかし、まだ本遺跡の周辺には、縄文時代と平安時代の遺構が遺存していると思われ、今後この周辺一帯の遺跡が保護されることを念願する次第であります。最後に、山梨県教育委員会文化課、山梨県埋文センターをはじめ御協力、御支援を頂いた関係諸機関に対し、文末ながら記して感謝いたします。

参　考　文　献

1，末木　健　1974　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』—北巨摩郡小淵沢町地内—　山梨県教育委員会

2，末木　健　1976　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』—北巨摩郡須玉町地内—　山梨県教育委員会

3，坂本美夫他　1983　「シンポジウム、奈良、平安時代土器の諸問題　甲斐地域」　神奈川考古第14号

4，土井義夫　1971　「関東における住居址出土の鉄製農具について」　物質文化18号

5，平出一治　1976　「平安時代住居出土鉄鏃の性格」　山麓考古第4号

図　　版

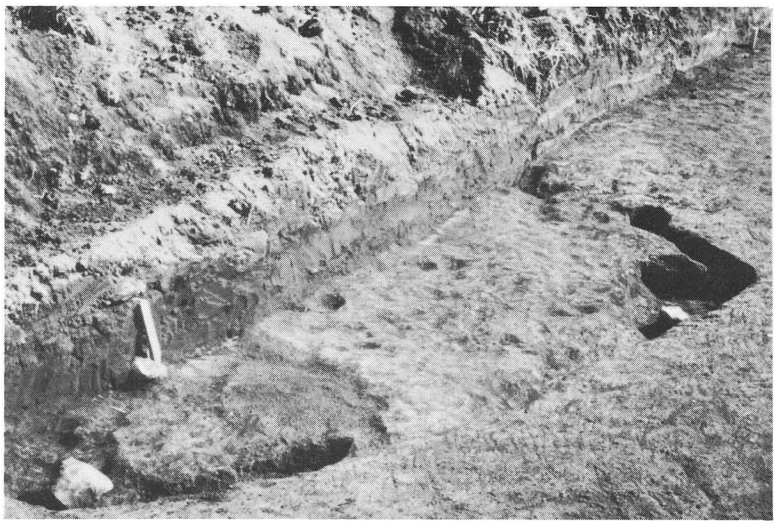
図版1

1，遺跡近景
（南より）

2，第1号住居址

3，第1号住居址
鎌出土状態

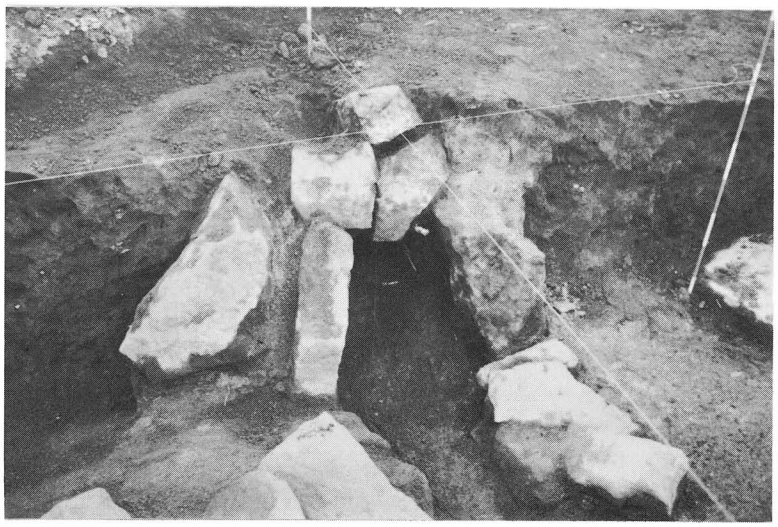
1，第2号住居址



2，第3号住居址

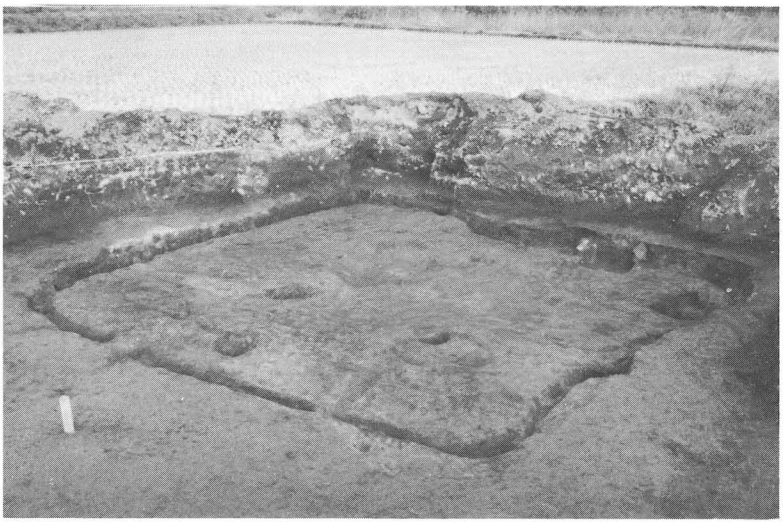
3，第3号住居址

「竈」



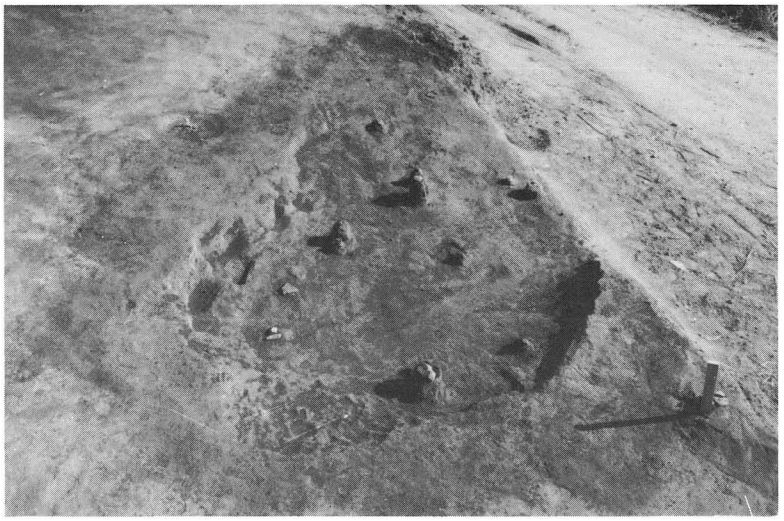
1，第3号住居址
遺物出土状態

2，第4号住居址



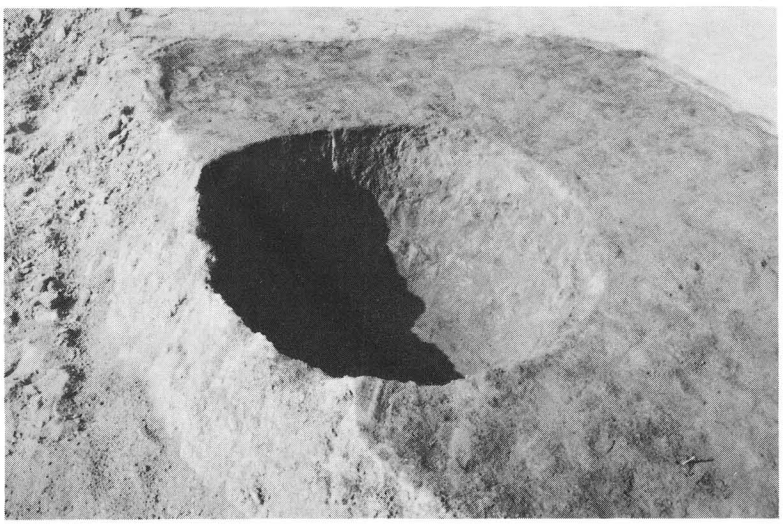
3，掘立柱建物址

1，溝状遺構



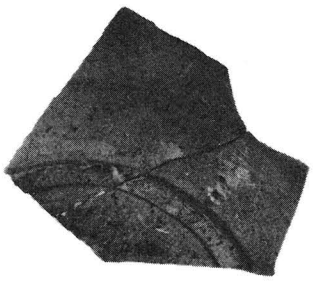
2，第1号土壙

3，第2号土壙



第 1 号住居址出土遺物

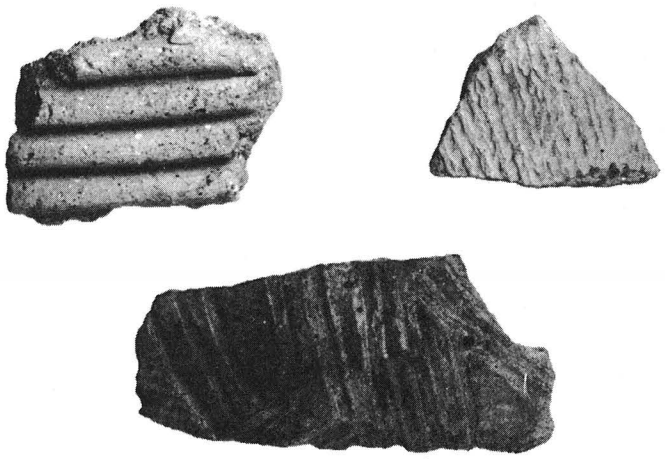
第 1 号住居址出土遺物



第 2 号住居址出土遺物

第３号住居址出土遺物

第4号住居址出土遺物



第１，２号土壙出土遺物

昭和58年3月25日　印刷
昭和58年3月31日　発行

小淵沢町前田遺跡
発掘調査報告書

発行所　小淵沢町教育委員会
印刷所　峡北印刷　株式会社